

おわりに

「強酸性土壌地帯の緑化対策の基礎」として、調査・設計について記述してきた。これらは、山の神・吹上両地区における実際の施工から導かれたものである。

山の神・吹上両地区は、先人たちの努力により復旧が行われてきた。構造物の破損が見られ、さらに森林化（緑化）に移行させることは成功を見ていない。しかし、基礎工として設置した土留工や谷止工は、機能低下が見られるものの、その効果は今なお維持している。

山の神地区では、崩壊地末端部で谷止工の効果により植生が侵入し、森林化に移行して現在に至っている。吹上地区も既設構造物により土砂移動が軽減された箇所に植生が見られ、崩壊地内に29科76種（同定不能1種）の植生が確認される。僅かではあるが植生の回復が見られる。

両地区の経緯や反省も含め、4カ年の調査・検討により、「自然環境に配慮し、現地に適応した植生を種子から、しかも樹木主体」とした新たな緑化目標を設定し、一生長期の生長確認を行った。植生生長の効果は追跡調査により把握しなければならない。地道な調査が今後求められる。しかし、この検討により調査方法などの基礎データを収集することができた。これまでの経緯は、特殊土壌地帯の緑化工の手引きとなる第一歩を踏み出したところである。

植生の回復や森林化は、様々な環境問題の緩和的な役割を担うものである。酸性土壌地帯から流下する酸性水は、下流住民の長年の課題となっている。植生の回復や森林化が、その機能の一つとして酸性水対策の一助となることを期待するものである。

